
大切をきずくもの

ユエ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

大切をきずくもの

【Zマーク】

Z9995B

【作者名】

コヒ

【あらすじ】

祖父ちゃんが亡くなつたという報せを受けたのは今朝のことだつた。
大切な家族を亡くした少年の物語。

(前書き)

大切なものは、いつだって傍に……

入院先で祖父ちゃんが死んだという電話があったのは、今朝のことだった。

一昨日、中学の卒業式を終え、少し早い春休みを迎えていた僕が電話を受けた。今朝早く容態が急変して、あつという間のことだったらしい。病院に泊り込んでた母さんは泣きながら「ハルキ、お祖父ちゃんの最期に立ち合わせてあげられなくて御免ね」と言つてた。祖父ちゃんが入院したのは去年の秋頃のこと。一週間ほど体調がすぐれなくて、検査をしてみることになった。健康自慢の祖父ちゃんのことだから大丈夫、と家族全員思つてたのに……。検査結果は癌と診断された。医者から余命半年と宣告され、家族で話し合つて祖父ちゃんには告知しないつて決めた。

僕は一度しか、祖父ちゃんのお見舞いに行かなかつた。

電話の後、居間のこたつでぼんやりしていると玄関の開く乾いた音がした。

「ハル、いるか」

その声で、隣の家に住む四つ年上の雄兄いと分かり、「いるよ」

とだけ返した。「お邪魔します」の大きな声に続き、ぎつぎつ、と廊下の鳴る音が近づいてくる。襖が開けられると、背の高い雄兄いが鴨居をくぐるようにして居間に入ってきた。

「よお」

僕も同じよつこ「よお」と挨拶を返した。

「おい、ちょっと寒いぞ、この部屋」

雄兄いは厚手のダウンを脱ぎながら部屋の隅に置かれたストーブの傍まで行き、灯油の残量を確かめる。

「……そうちかな？」

「そうかな、じゃない。ハルは昔から風邪引きやすいんだから。ストーブつけるぞ。あと、なんか温かいの淹れてくる」

面倒見のいい雄兄いらしく、手早くストーブに火をいれ、台所で僕が好きなカフェオレを作つてきてくれた。小さい頃、まだコーヒーが飲めなくて、でも雄兄いの真似をして飲みたいと言つたら作つてくれた、牛乳たっぷりで甘めに作つたやつ。それがマグカップになみなみと注いである。「熱いから、フーフーして飲めよ」と言つてそれを渡してくれた。

「……雄兄い、大学は？」

僕は手の中の熱いカフェオレを、言われた通りフーフーと冷ます。「そんなの、とっくに春休みだよ。ハルが泣いてる顔を見てやろうと思つて来たんだ」

向かいに座つて頬杖をつきながら、八重歯の覗く悪戯っぽい表情で、そう言つた。灯されたストーブがじんわり部屋を温めていく。

母さんが様子を見てやつてと頼んだのかな。

「なにそれ。じゃあ残念だつたね」

僕は泣いてなかつた。

悲しくないわけじゃない。生まれたときから一緒に暮らしてた祖父ちゃんだ、悲しくないわけがない。

でも、涙は流さなかつた。自分は泣いちゃいけない気がしていた。

「みたいだな、残念」

肩を竦めて、雄兄いが自分のカップからコーヒーをすする。

ふと目の端に、天井近くの壁に飾つてある写真が映つた。僕のお宮参りの写真だ。小さい頃に死んじゃつたお祖母ちゃんが赤ちゃんの僕を抱いて、その隣には『春木』と紙いっぱいに大書された命名書を掲げた祖父ちゃんが写つてゐる。母さんたちは書道の先生をしてお祖母ちゃんに命名書を書いて貰うつもりだつたのに、祖父ちゃんは自分が書くと言つて、頑として譲らなかつたらしい。

その写真に残る家族は、もう誰も僕の傍にいない。笑顔の二人を写真だけが色褪せることなく見せてくれる。

まだ少し湯気の立つマグに息を吹くと、滑らかな水面に波紋が広がつた。

「……ねえ、雄兄い」

「ん?」「

「僕の名前の『ハルキ』って、春の木って書くでしょ? これ反対に並べてみて」

「えっと、春と木を反対にしたら……『椿』か」

「雄兄いは手の平に指でその字を書きながら答えた。
「そう。ほら、知ってるだろ? 母さんオペラの椿姫の大ファンなの。だから子供の名前は絶対『椿』って付けたかったんだって。僕さ、男だよ? 勘弁してよって感じだよね」

そう言って口に含んだカフェオレは甘くて懐かしい味がした。昔よく飲んだのと同じ味。いつもと同じ味なのに、今日はとても安心できた。

「どうして、春木になつたんだ」

話の先を促してくれる。真っ直ぐに僕を見据える鳶色の瞳には、いつもそうであるように雄兄いの優しさが宿ってる。

「祖父ちゃんが、椿の花は首が落ちるイメージで不吉だからって猛反対したんだ。……年寄りらしく迷信深いよね」

実際、祖父ちゃんは凄かつたらしい。姓名判断の先生に何人も相談したり、名前に付ける漢字を選ぶのに、ぶ厚い字典と首引きについて一字一字の意味を調べたりしてたと聞いた。

何でも大袈裟ではり切り屋の祖父ちゃんだったと思う。いきなり、ぽん、と頭に雄兄いの大きな手が置かれた。

「ハル、よかつたな」

そう言いながら力まかせに僕の頭を撫でた。

「な、何が?」

訳が分からず混乱して僕の隣で、笑窪を浮かんだ顔で雄兄いが笑っている。

「『春木』って名前を貰えて」

「え、椿にならなくて済んだってこと?」

「そりや、そうならなくて良かつたけど……。」

「違うよ。凄え孫思いの祖父ちゃんを持つて、よかつたなってこと。きっとさ、迷信でもなんでも少しでもこの子が幸せであつて欲しいつて思つたんだろうな、祖父ちゃん」

その言葉を聞いて、少し恥ずかしくなつた。何だか自分が至らない人間に思えて、雄兄いから顔を逸らせてしまう。

どうして、そんな風に思えるんだろう?

こんな何でもない話に思つてた。でも、雄兄いは優しい理由や秘められた想いを見つけてくれた。

いつだつて僕は、そこにある大切な想いや大事な言葉を見落として、後になつて誰かに気づかれる。それは僕がまだ子供だからなのか、雄兄いや周りの人人が聴いからなのかは分からない。ただ、もし自分もそう出来たなら、色んなこと後悔しないで済んだんじやないかつて思うんだ。祖父ちゃんとのことも……。

僕は雄兄いの言葉に、小さく「うん」とだけ返した。

それから、とりとめもない話をして時間を過ごした。春から通う高校の話とか、人気のテレビ番組の話とか。気づいたら、居間の鳩時計が十四時を報せていた。

「ああ、もうこんな時間か。何か食うか、ハル?」

そう言つて雄兄いが立つた時に、玄関でチャイムが鳴つた。

「僕が出るから」

居間から寒い廊下に出て玄関を見ると、嵌つたすりガラス越しに人が立つていた。渋い色味の生地やシルエットで着物を着ている感じがした。

「どちら様ですか」

「玄関越しに尋ねてみる。

「修一郎さんはご在宅ですか」

少ししゃがれた老人の声が返つてきた。

祖父ちゃんの名前だ。この人、まだ知らないんだ。

僅かに心臓の音が大きくなつた気がした。浮かない気持ちで玄関を開けたところに、祖父ちゃんと同じくらいの年恰好の男性がいた。細められた目元から、人の良さそうな瞳が覗いている。

「突然すいません。ちょっと近くまで寄つたものですから、久々に顔でも、と」

老人は二コ二コと嬉しそうな笑みを向けてくれた。

「あの祖父は、その……」

言葉を見失つてしまつた。ひどく口にするのが、怖かつた。言うべきことは頭にあるのに、喉につかえて上手く出てきてくれない。握り締めてる拳には、現実の手ごたえが感じられなかつた。

ちゃんと、言わなくちゃ。

そう自分に言い聞かせ、乾いた口を一生懸命に動かした。

「祖父は、今朝亡くなりました」

言つた。でも、もう心が飽和状態で、これ以上は何も言いたくない。唇をきつく引き結んで、僕はそのまま俯いてしまう。

「……ですか。それは、大変間の悪いときにお邪魔してしまいました」

丁寧な声だけど、その顔には言葉にならない哀しみが滲んでたかもしれない。俯く僕の瞳には老人の着物の裾と履物だけしか映らなかつたけれど。

早く帰つて下さい。

勝手な思いに駆られる。でも、それしか頭にはなかつた。

「君はもしかして、春木くんかい？」

急に自分の名前を言われて、反射的に僕は顔をあげた。老人の顔に笑みはもうなかつたけど、穏やかな表情をしている。

「そうか。お祖父さんは会えば君の話ばかりしていたよ。春木が歩いたとか、今度中学に上がるとか」

老人のする話は、僕の心をざわざわと落ち着かないものにしていく。

目元に刻まれた皺が、祖父ちゃんのそれと同じに見えた。

「はじめて喋つた言葉は『じいじ』だといつも自慢しどつた。心の優しい子じやと。

はあー、そうか。修一郎がなあ……

話を終えると、老人は寂しそうな顔で帰つて行つた。その後ろ姿に、黙つて一礼をした。そうしなきやいけない気がしたから。居間に戻ると、雄兄いがカツプ麺を作つて待つてくれた。

「誰だつた？」

「祖父ちゃんの友達。死んだこと知らなかつたみたい」

まだ心の中はざわざわと騒いで、溢れそうな想いが出口を求めている。誰かにこの気持ちを打ち明けて樂になりたい。そう、思った。

「……僕、祖父ちゃんのお見舞いに一回しか行かなかつたんだ」

立つたまま、突然喋りだした僕に、雄兄いは黙つて顔だけを向けてた。

雄兄いに全部聞いて欲しい。行き場のない両手同士を組み合せた。

「嫌いだつたわけじやないんだ。ただ、どうしていいか分かんなかつた。もう病氣で長くないつて聞かされてて、祖父ちゃんの前で母さん達みたいに上手く笑えないんだ。話しても表情に出でんじやないかつて……祖父ちゃんに、ばれるんじやないかつて」

母さん達が悲しくなかつたはずない。母さんにとっては実の父親なんだから。本当は僕なんかより、ずっと悲しい思いだつたはずなのに。でも、母さんは最期まで傍に居続けた。僕はそんな風には出来なかつた。最期まで一緒に笑い合える強さも、傍に居る優しさも持てなかつた。ただ、不安な自分や病氣のことを祖父ちゃんに知られる恐怖に負けたんだ。

「祖父ちゃんの友達が言つてた。祖父ちゃん、僕のことばかり話してたつて。心の優しい子だつて」

嬉しそうな顔で話す祖父ちゃんの顔が、ありありと脳裏に浮かぶ。「そんな子じやないよ、僕。病院に行くのが怖くて塾が忙しつて

言つたり、受験が終わつたら行くよつて、後回しにしたり
時間なんかないつて知つてたのに。いつも、心の中で引つかつてたのに。

それでも、もう会えなくなるつてことより『今』会えなくなるのが怖かつた。

「最低だよ……」

耳鳴りがするほど強く歯を食いしばつても、少しも自分を責める気持ちは無くなつてくれなくて。自分を恥じたり詰つたりする言葉ばかりが頭の中でこだまする。大切なことだった。逃げたりしちゃいけないことだった。だから 今こつして後悔ばかりが胸を噛むんじやないか。

そんな僕の頭を雄兄いが優しく撫でてくれた。

「だから泣いてなかつたんだな」

「僕に泣く資格なんかないよ」

本当は泣きたかった。死ぬのは悲しいから、会えなくなるのは寂しいから、何よりも祖父ちゃんのことが大好きだから。だけど、そうするには僕はあまりに何もしなさ過ぎた。

「泣けばいい。みんな知つてたさ。おじさんもおばさんも祖父ちゃんも。

ハルが素直じやなくて、祖父ちゃんが大好きで、優しいから会つことを怖がつてゐることくらい」

慰めの言葉は、いつそ僕の心を逆撫でした。優しい声が、今は激しく苛立しかつた。

「嘘だ！ 祖父ちゃん、薄情な孫だつて思つてた。あんなに可愛がつたのにつて。絶対そう思つてた」

僕はその場にしゃがみ込んだ。祖父ちゃんに嫌われたんじやないかと思うと、もう……。

雄兄いが肩膝をついて、穏やかに語りかけてくる。

「嘘じやない。俺が見舞いに行つたとき祖父ちゃんと約束したんだ。自分が死んだら、ハルキの傍に居てやつてくれつて。祖父ちゃん言

つてた。『ハルキは人一倍優しくて、泣き虫な子だから誰か傍に居てやらないと』つて

雄兄いの瞳に映る自分が見えた。その搖ぎ無い鳶色の瞳は、弱い僕を包んでくれてるようで。もう、我慢できなかつた。僕は雄兄いにしがみ付いて、声をあげて泣いた。幼い子みたいに。

「大好きだつた、死んで欲しくなんなかつた。ずっと、ずっと一緒にいたかつたよ」

嗚咽と涙に咽ぶ声で、祖父ちゃんに言えなかつた言葉をぶつけ、繰言のように「ごめんなさい」を連呼した。その間、雄兄いは固く僕を抱きしめてくれた。それは昔、やつぱり僕が泣いたとき祖父ちゃんがそうしてくれたのと同じ温もりだつた……。

空が高く澄んだ日に、祖父ちゃんの火葬は行われた。お別れのときに見た祖父ちゃんは、僕の知ってる姿より大分瘦せていたけれど、穏やかな表情をしていてくれた。

白い煙が空に還つていいくのを見つめていたら、母さんに呼ばれた。「これ、お祖父ちゃんの病室から出てきたの」

渡された白い封筒の表には『春木へ』と書かれてある。ゆつくり慎重に開けると、中に白い簡素な便箋が入つていた。

春木へ

この手紙を読んでる頃は、もつ儂は祖母さんのところに行つてゐるじやろ。

自分のことだから良く分かる。

もつと一緒にいたいが、こればっかりは順番だから仕方ない。

春木 大切なものをたくさん築けよ。そして、愛すべき人も同じくらい見つける。

父さんや母さん、隣の雄坊……これから出会う友人や恋人。

そんな人たちを大切にしなさい。

春の若木に人が喜びと命を見つけるように、人々の幸いにお前もなりなさい。

そういう想いで名前も付けた。

成長した春木を儂は見られんが、優しいお前ならきっとなれると信じとる。

ただ、お前は泣き虫だから今も泣いてないか心配だな。
いつまでも泣いとると、心配でおちおち天国にも行つとれんぞ。
じゃあな、春木。

達筆とは言いがたい祖父ちゃんの筆文字は、それでも僕の中でひどく響いた。泣き虫 そう祖父ちゃんが言つたとおり零した涙で文字が滲んだけれど、大切な想いが鮮やかに心を彩つてくれた。

大切なものの。

それが何かを知ることは子供の僕には難しい。ただ、この手紙はこれから僕が築いていく大切なものたちの一つなんだということだけは、今もはつきり分かつてゐる。

薄れゆく最期の煙を見つめながら、

「ありがとう、祖父ちゃん」

そう笑顔をおくつた。心配しないで、とこう想いをこめて。

(後書き)

こんには、ユヒです。

今回は初めて恋愛ではない話を投稿しました。

大切な人の喪失はとても悲しいです。

でも誰もが体験する普遍的なものだけに描いてみたくなりました。

よろしければ、ご意見ご感想をお聞かせください。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9995b/>

大切をきずくもの

2010年10月8日15時45分発行